

シホが失踪した翌日の朝。

アオイは自室にて出勤の準備をしていた。個室にあるベッドの上には綺麗な形で騎士制服と剣が置かれている。

彼女が住んでいるのは王都にある実家であり、小さな商会を営んでいる両親は1か月ほどの出張の最中だった。

(ああ……、シホ……)

彼女は後悔に苛まれていた。

シホとは5年以上、相棒として共に過ごしてきた。

シホの正義の心に影響されて、ドライな性格だったアオイも小さな正義の心を持ち始めていた。

何人にも受け入れられ、いつしかは立派な騎士となるであろうシホと、それを支える自分。

そんな妄想をしてしまうほど、アオイはシホのことが大好きだった。友情を超えた、家族と同様の信頼をシホに預けていた。

「はあ……」

両腕がもがれたような喪失感と、あの時喧嘩になってでも止めていればという後悔の心が、重く、重くのしかかる。

このまま色々と考えたかった。しかし、時間は過ぎゆき、出勤時間が近づいてくる。

(シホ……、貴女の方まで……私が騎士として、正義を全うするわ)

前日、現場検証をした結果、その場には何も残っていなかった。シホは連れ去れ、本部は死亡扱いとした。裏組織に連れ去れら騎士の末路とは決まってそういうものだった。

(そして……、どんな形でもいいから……貴女のことを見つけ出す……!!)

遺体でも、骨でも、血でも、何かしらの資料でもいい。

彼女の痕跡を持ち帰りたいと、アオイは決意を固め、その生涯をかけてシャドウを追いかけることを決めた。

「そろそろ……、行こう」

騎士制服を着て、帯剣し、準備を終えたアオイは自室を出て玄関に立ち、カギを開けようとした瞬間。

ートントン

と、ドアがノックされた。

昨日の今日だ。シャドウが殺しに来たのかもしれない。

アオイは最大の警戒心を持って、音を立てないように剣を鞘から引き抜き、ゆっくりとドアを開いた。

「—う、そ……」

ドアの先にいた人物を目にし、彼女は驚いたように目を大きく見開いた。唇や手が震え、それはまるで幽霊でも見ているかのようなようだった。

「ごめん、心配かけた」

その人物は親しみを込めて、それでも申し訳なさそうにそう言った。それもそのはず。ドア先に立っていたのは、連れ去られ死んだと思われていたシホだったからだ。

「シ……ホ……。ほん、とう……に……?」

「うん。運よく逃げられたんだ。シャドウの本拠地も分かった。これであいつらも終わりってわけ」

こっちがどれだけ心配したのか。絶望したのか。シホは分かっているのだろうか。

心配や後悔の気持ちが吹っ飛び、あきれてしまうほど、シホはシホのままだった。

シホはただ連れ去れただけでなく、敵の本拠地まで特定してきた。

彼女の爛々とした正義の心は、諦めを知らない。どんな苦境にも恐怖をものともせず、屈服しない精神の持ち主だ。アオイはシホの全てを知っていると内心で自負している。だからこそ、彼

女の生還と持ち帰った成果は、シホらしいとも言える。

「私、心配したのよ……。ほん、とう、に……。しんぱ、い……。したん、だ、か、ら……」

心の底から湧き上がってくるのは、生還を喜ぶ心。それはアオイに涙を流させる。

「ごめん……。あの時一緒に逃げればよかったね。本当に……。ごめん……」

シホはアオイを安心させるために、両腕で彼女の身体を包み込み、ギュッと抱きしめた。シホの身体の暖かさが、本当にシホが帰ってきたのだと改めて実感させ、さらなる涙を流させる。

「うう……。よかつ、た……。ぶじ、で……。うっ、うう……」

涙を流すアオイを抱きしめているアオイ。それは感動的な再開だった。しかし、シホの顔にはアオイを安心させるために、笑顔は浮かんでいても、その目には意思の光はなかった。

アオイはシホを信じ切っていたからこそ、知らない。どんな苦境や恐怖をものともしない、屈服しない精神の持ち主であっても、シホはまだまだ精神的に未熟な少女であるのだと。シホは永遠にも続く快樂に躰けられたのだと。肉体を改造され、洗脳を施されたシホは、アオイの知るシホとは別存在になっているのだと。

「シホ……。本当に良かった……」

何も知らないアオイは、シホとともに出勤した。敵であるシャドウの一兵卒になった肉人形のシホとともに……。

アオイはシホの手をつないで引っ張り、警察騎士団本部をズンズンと進む。目指すは団長室だ。

シホはシャドウにさらわれた。よって死亡扱いとする。ある程度の地位にいる騎士たちはそのことを聞き及んでいたもので、シホの姿を見た者たちで、時折おどろいているものたちが混じっていた。

「失礼します、団長!!」

ノックもせず、アオイは団長室へと入った。礼儀正しく、その所作まで称賛されるアオイが、こんな行動を取るのはいつものアオイでない証拠だった。

団長室の中は左右の壁に本棚があり、法律や訓練の方法などの本がずらりと並べられていた。後ろには壁と一つの大きな窓があり、壁の左右の隅にある樽の中には地図がいくつも入っていた。また窓のすぐそばには大きな机と椅子があった。

中に入ると団長、チサト・ナカノは机に向かい書類の処理をしていた。チサトはアオイを一瞥すると、処理が途中だったためか再び書類へ視線を戻した。

「どうしたのだ、ノックもせずに……」

「団長……!! シホが、シホが……。帰還しました!!」

「何……!?! それは本当か……!?!」

バツとチサトが顔を上げると、確かにアオイの後ろにシホが立っていた。

「攫われてしまいましたが、運よく帰還できました。ご心配をおかけしました」

シホがそう言って、頭を下げた。チサトは立ち上がって、シホの元へ行くと力強く抱きしめた。

「よくぞ……。よくぞ無事に帰ってきた。拷問などは受けていないか」

「はい、大丈夫です。それよりも……。シャドウの本拠地も特定できました」

「何だと……!?! それが本当なら手柄だぞ」

チサトはシホを離すと、樽の中から地図を探し出し、机を整理して広げた。

「どこだ？ やつらの拠点は」

広げた地図は王都周辺の地図だった。シホとアオイは机へと近づき、シホは迷いなく、一点を指さした。

「ここです」

指さした場所は王都から20kmほど離れた草原地帯だった。

「馬鹿な、ここには建造物などないぞ」  
「秘密の地下施設があるんです。私をさらったやつら、正確な位置まで口にしていました。おそらく私が逃げられないと油断していたのでしょう」  
「ふむ……。それは罠の可能性もある、が……。本当の情報の可能性もある、か……」

チサトは顎に指を添えて考え始めた。それはごく短時間で終わった。

「罠であろうと食い破ればいいか。我々は大陸の覇者、大国ムラサメの騎士団だ。地下組織など見つけてしまえばどうとでも料理できる」

その言葉の力強さから確固たる自信が読み取れる。

「出発は4日後にしよう。精鋭100名を連れて、殲滅する」

チサトは部屋を出て、主たる者たちに召集をかけるために、部屋を出ようとした。一緒にシホとアオイも出ようとする。

「シホ。もしこの情報が偽であっても、罠であっても君に責任はない。全ては決行を決意した私の責任だ。それは覚えておけ」

「はい、ありがとうございます」

「君とアオイには2日の休暇を与える。ゆっくり休め」

そう言ってチサトは団長室を出ていった。

シホ達も部屋を出るとそれぞれの家に帰った。

シホの失踪については、まだシホの家族には話されてなかった。そのおかげで家に帰っても大きな騒ぎになることなく、シホはシャワーを浴びた。そして赤いワンピースを着ると、アオイの家へと出かけた。

「いらっしやい」

アオイの家は、小さくとも商会の主の家とあって一般家庭の家よりも大きかった。玄関から入ると、目の前には小さなホールがあり、曲線状に曲がった階段、その階段の下にはリビングへ行けるドアがあった。左右の扉の奥には娛樂室や來客室があり、2階には両親の部屋とアオイの部屋があった。

シホを出迎えてくれたアオイは白いワンピースを着ていた。2人は一緒にリビングへ向かう。

「今、紅茶を出すわね」

「ああ、待って。私が出すよ。心配かけたお詫びに」

幼少騎士育成校から5年以上の付き合いであり、何度もアオイの家に遊びに来ているシホはどこに何があるのかも把握しているし、時折、アオイやアオイの両親にお世話になっているお礼として紅茶を出すことがあった。

「いいわよ。貴女のほうが大変な目にあったんだから」

「いいから、いいから。ほら、座って」

シホは早歩きでリビングにある大きなテーブル、その周りに置いてある、4つの椅子の1つを引いて、アオイの肩を押してその椅子に座らせた。

「もう、強引なんだから」

もう永遠に迎えることがないと思っていた日常。それを迎えることができ、アオイは安心感から微笑んだ。

彼女の心に絶望感はなく、幸せでありつつ、何度も苦難をシホとともに超えるだろうという未来への希望があった。

「はい、どうぞ」

キッチンで紅茶の準備をして、カップに紅茶を適量入れて、シホが1つをアオイの対面に、もう1つをアオイの前に置いた。それから家から持ってきたお茶請けをお皿に盛り、テーブルの中央に置くと、アオイの対面に座った。

「お先にどうぞ。今日は美味しく入れられたと思うんだよね」  
「へえ、それは楽しみね」

アオイは紅茶を一飲みする。

「……うん。美味しいわ。プロとしてもやっていけるんじゃないかしら」  
「おだてても何もでないよ」

アオイはそれからシホが用意したお茶請けに手を伸ばした。今日持ってきたのはマカロンであり、サクリとした歯ごたえが心地よく、上品な甘さが紅茶を飲ませてと喉を刺激する。

「本当に美味しいわね」  
「2日も休みもらっちゃたね。どうする？ 自主練でもする？」  
「貴女、いつも自主練を提案するけど、買い物でも提案しなさいよ」

他愛のない話が続く。シホとアオイはマカロンを1つ食べては紅茶を飲み、それを繰り返していき、みるみる内にマカロンと紅茶がなくなっていく。

「あら、もう最後の1つね」  
「いいよ、食べて」  
「いいの？」  
「お詫びも兼ねるからね」  
「それなら遠慮なく」

そうして最後のマカロンをアオイが手に取って、口元まで運んだ瞬間、ポトリとマカロンが床へと落ちた。

「あ、れ……？」

急にアオイの視界が揺れだした。強烈な眠気が襲い、全身から急速に力が抜けていく。ぼやける視界の先では、シホが自分の前から紅茶を真横へと移動させていた。まるで自分がこのまま倒れてしまうことが分かっているかのように。

「し……ほ……」

瞼が落ちそうになるのを必死に抵抗する。腕をつまんで痛みを与えようと試みるも、どうしても力が入らない。

薄れゆく意識、抵抗できず閉じゆく瞼。

アオイが最後にみた光景は無表情でこちらを見ているシホの姿だった。

「……あ……」

アオイがテーブルに突っ伏すように倒れた。すでに紅茶を避けていたため、紅茶が零れたり、カップが床へ落ちることはなかった。

シホはアオイを担ぎ上げた。騎士として鍛えているため、同年代一人であれば、シホも運ぶことができる。

玄関に近づき、ドアを開くと、家の前に1台の馬車が止まっていた。御者と馬車の傍に立っている、2人の男がおり、馬車の傍に立っている男がシホに手で合図を送った。シホはアオイを担いだまま、周りの目を気にせず堂々と出ていき、馬車に乗りこむ。

それを確認した御者は馬車を走らせた。

「こっちは可愛い系、こっちは綺麗系だな。どうだ、ヨシヤス。味わうならお前はどっちを味わいたい？」

「おいおいコウ。まだまだガキだぞ、そいつら」

「確かにこっちの……確か、シホだったか。こいつはガキみてえなナリだが……、へへ、こいつはもう女と言ってもいいんじゃないか」

御者と男が会話を始めた。御者の男はヨシヤス、馬車の中にいる男はコウと言うらしい。コウが座っている対面にはアオイを横に寝かせたシホが無表情で座っており、コウは下卑た笑みを浮かべてアオイの形のよい柔乳を躊躇いもなく揉んでいる。

この2人はシャドウの構成員だ。シャドウは規模で言えば構成員50人ほどの小さな組織であるが、その勢力と稼ぎは大物中の大物レベル。政府に多額の賄賂を渡し、少ない構成員でもここまでの影響力を得ていた。

さらにシャドウの主な取引は薬物取引であると騎士団は確信しているが、そちらはシャドウがわざと流した情報だ。確かに薬物取引もしているが、それとともに人身売買をしている。シャドウの主な稼ぎ頭は人身売買の方であった。

魔力研究のついでに洗脳装置の開発に成功したアシラは、さらった女を洗脳し販売、もしくは貸出を行っている。稼ぎとしては貸出の方がメインであり、販売は魔力を生成する臓器が傷つき、魔力の研究に役に立たないものが販売されている。

「それによお……。ガキだろうと、ボスの手にかかったら高級娼婦と同じくらいアンアン喘ぐ、感度のいい最高の女になるんだよ」

「俺は乗り気にならねえなあ。そいつも確かに体つきは女だが、顔はガキっぽさを残してるしよお。やっぱり女はもうちょっと年を重ねた、肉付きのいいやつじゃなけりゃよお」

2人はシホとアオイをただの娼婦のような、奴隷のような、都合のよい存在として扱っていた。シャドウの構成員にとって、囚えた女はただの慰み者であった。

シャドウの構成員は元々はゴロツキ、つまりは学がないものが多く、当初は組織に対する忠誠心なども欠片もなかった。そんな彼らが、シャドウに居続けた理由、徹底した情報統制に従っていた理由はシャドウという組織が天国だからだった。

ここでアシラの話しよう。アシラの目的は、魔力の研究。彼の天才的頭脳は他者の協力なくしては研究は進まないと考えなかったし、誰かと協力して研究を進めたいとも思わなかった。しかし、1点だけアシラの頭を悩ませていたのは資金の問題だ。

それを解決するために、人体実験すら躊躇なく行うことができるメンタリティの持ち主であるアシラは、もっとも簡単に金を手に入れる方法、犯罪へと手を染めた。だが、1人では得られる金などたかが知れている。ゆえに作り出したのは犯罪組織。非凡なる彼の頭脳は研究だけでなく、犯罪組織を運営することもできた。

そうして構成員として集めたのはゴロツキどもだ。どこかの裏組織にも属していない、ただのゴロツキ。彼らは簡単に手に入る人材。そう判断したアシラは一人、また一人と地道に構成員を集めた。そして彼らに対する報酬にも糸目をつけない。売り上げた半分は必ず与え、組織の売上として手に入れた資金で研究を進めつつ、売りさばく麻薬も開発していった。その開発した麻薬の中には、依存性の強い媚薬や協力な眠り薬などもあった。

金だけではない。アシラは女も与えた。魔力は女性にのみ宿っている。構成員に攫わせ、研究に使った後は彼らの慰み者として使わせた。壊れれば、また攫わせ、使わせる。

金、女。ゴロツキにはそれさえあれば、それを与えてくれるものは神であり、供給してくれる限りはその場所は天国だった。

やがて、天国は当たり前ものとなり、その場所を守るために必死になり、いつしか愛着がわき、彼らは組織に忠誠心を持った。

ただのゴロツキはこうして組織の一員に生まれ変わったのだ。

徹底した情報統制、どの勢力にも舐められないように軍人ばりの訓練は当たり前ものとなり、アシラについていけば欲望を満たせ続けることができるという、ボスに対する信用と信頼を持った。彼らは徒党など組んでいなかったが、いつしかそう全員が思うようになった。

ただの研究者とアシラを馬鹿にするものは誰一人いなくなり、ボスの言葉は絶対となったのだ。

こうして盤石なる組織を作り上げたアシラは、思うがままにこれまで研究を続けてきた。

「まったく俺たちは幸せ者だぜ」

「ああ……。まったくだ。金も女にも不自由しない。ボスに拾われてよかったぜ」

ヨシヤスとコウがそう話している内に、馬車は目的地、王城近くの高級住宅街にある邸宅へ到着したのだった。

シャドウの本拠地はシホが警察騎士団に伝えた場所ではない。王城の地下、そこにシャドウの本拠地があった。灯台下暗しとはまさにこのことであり、邸宅は本拠地へ入るための入り口だった。

ただ。高級住宅街は人通りが少なく、昼間ですら人の目があまりなく、夜であれば制限なく出入りが可能だった。

地下の一室。そこにアオイは運ばれた。

部屋の中央には茶色のシーツの敷かれた、成人男性の腰下あたりまで高さのある縦長いベッド。その上部には枕がひとつ置かれ、足が置かれるであろうところには天井から長さが調整可能なロープが垂れており、ベッドの四隅にもロープがあった。部屋の左壁には棚があり、そこにはいくつかの液体の入った口の広い瓶と、ディルドが置かれている。棚のすぐそばには鈍色のキャスター付きテーブルがあり、その上には様々な用途不明な道具が置かれていた。

天井の照明は部屋全体を照らし、部屋に広く敷かれた黒い絨毯が隠していないタイルがピカピカと照り返していた。

その部屋に運ばれたアオイはベッドの上に寝かされている。意識はなく、ポニーテールは解かれ、服はすべて取っ払われている。露わになった彼女の肉体はシホに比べると非常に素晴らしいものであり、まだまだ大きくなりそうな張りのある乳房は重力に逆らってその整った形を維持している。また、股間にはうっすらと陰毛が生えており、丁寧に処理をしているのか陰唇の周りには毛などなく、クリトリスの上に卵型でわずかに茂っているだけだ。

「おっ、今日は10代半ばくらいかなあ。こういう子にアクメ教え込むの好きなんだよねえ、俺」

「お前……、前の25歳の生娘にも同じこと言ってなかったか?」

「ははっ。じゃあ、俺はアクメを教え込むのが好きなんだ」

アオイが眠っている部屋に2人の男が入ってきた。

一人は20台に見える青年で、人懐っこそうな笑顔を浮かべている。名前はミナト。娼館専属の調教師の息子だった彼は幼いころから女の調教を経験してきた生粋の調教師であり、若いながらも熟練した腕を持っている。女を調教するのを楽しんでおり、特に絶頂を知らない女を苛めるのが大好きだった。

もう一人は30代後半に見える男で、眉間にしわを寄せている。名前はマサノリ。熟練の調教師であり、彼は仕事に生きる人間で、ただ淡々と幾人もの女を雌へと仕立て上げてきた。ミナトとは違い、調教を楽しんで行っていないかった。

この2人はシャドウの構成員ではあるが、ゴロツキから構成員になったわけでない。まだ肉体改造装置などが開発されていなかった時代に、肉体改造を施すためにスカウトした人材だった。

「さてさて～、とっと準備しちゃうよ～」

ミナトが棚などからいくつかの瓶を取り出し、キャスター付きテーブルの空いている場所に置いていく。

マサノリは手に持っていた小さなメモを読んでいた。そこにはアオイに何の薬を飲ませたのかが記されている。

「これは……。どんなことをしてもあと3時間は目が覚めないぞ」

記載されていた薬品、眠り薬の効果は何をしても4時間程度は起きることのない。まるで死んでいるかのように深い眠りに落ちる、強力なものだった。無味無臭であり、普通の誘拐などであれば使わないが、今回は国を取るための重要な作戦の一部。アシラは金に糸目を付けず、最高のものを構成員に与えていた。

「へえ。じゃあ、目が覚めた時、この子……ええっとアオイちゃんは自分の肉体の変化にびっくりするだろうなあ」

「まあ、するだろうな。しかし、いいのか。その間に500を超える絶頂を経験するわけだが、アクメを教え込むのが好きなんだろう?」

「眠っている内に教え込むのも好きなんだよ。いきまくってる時に意識戻ったら、頭の中快樂でぐちゃぐちゃで何が起きてるかわからないだろうなあ。おっと、そういえばこの子はそもそもオナったことあるのかな」

テーブルに瓶を乗せたミナトは、ベッドの下部近くでテーブルを止める。そして乳首や、片足を軽く上げて彼女の肉ピラやクリトリスを観察する。

「うん。この子はまだオナったことないね」

「そうだな」

一緒に見ていたマサノリもそう判断した。熟練の調教師である彼らは乳首やアソコの状態を見るだけで自慰をしたことがあるか、セックス経験はあるかなどが見分けることができた。

「じゃあ、マサノリさん。始めようか」

「よし。お前はどっちを担当する」

「下」  
「そう言うと思ったよ」

マサノリはテーブルに乗っている薬瓶を開ける。その中には透明な液体、ローションで満たされていた。これには、シホの肉体改造の際に彼女の肉体に塗りたくられた粘液が混ざっており、アオイの肉体を変貌させる恐ろしいローションだった。それに2人には中和剤が配られており、服用していた。もし飲み忘れればローションにに触れる手のひらは、感度抜群の手になってしまうだろう。

そもそもなぜ、今回はミナトとマサノリに肉体改造を任せることになったのかということ、アシラが別の実験に手を取られているからだ。そういう時は決まって肉体改造は調教師たちに委ねられる。

ミナトとマサノリは薬瓶からローションを手のひらに掬い、ミナトはアオイの下半身に、マサノリは上半身にトロトロとかけた。

「……う……ん……うう……、ふ……う……は……あ……」

マサノリは腹部からゆっくりと円を描くように、馴染ませるように塗りにくっていく。次に下から掬い上げるように乳房を優しく手のひらに収め、指先で揉む仕草をする。それから肩、腕手と塗っていき、腕の身体の隙間に手を入れ、脇にもローションを塗っていく。最後に左の乳房を両手で優しく包み、少しずつ少しずつ、乳房の頂点に向かうように包んでいる手を進ませていき、片手でむにむにと柔肉を揉みながら、もう片方の指で乳首をコリコリと弄る。

それを右乳房にも行い、何度も何度もローションを追加しながら同じ行動を繰り返した。ミナトはそれぞれの脚に同時に着手する。まずは膝から下にかけたローションを馴染ませるためにマッサージをしながら塗っていく。足は指の間まで丹寧に塗り、足の裏にも十分に塗っていく。次に膝から上、太ももは大胆に大きな動作で練りこむように塗りにくっていく。最後はもちろマンコだ。だが、中まではまだ塗らない。太ももと太ももの間に手のひらを縦にして滑り込ませ、閉じた肉華にピタリと手のひらの側面を押し当てると、上下にゆっくりと動かし始めた。また空いたもう片方の手で包皮に隠されたクリトリスをぷりっと剥き、優しく親指で小豆を押しつぶして、ぐりぐりと押し付ける。

マサノリと同様、何度も同じ行動を繰り返し、ローションを確実にその肉体に染み渡らせていく。

アオイの身体はだんだんと熱くなり、発汗し、美しい顔を赤らめさせていく。

「ふ、う……あ……ああ……、んふ……ん……、く……あ、あ……あ……」

薄く開いた口からはか細いながらも喘ぐ声が漏れ、熱く湿った吐息を吐き鼻息も荒い。照明の光がローションと汗に濡れた女になりかけの肉体をテカテカと淫靡に照り映えさせ、アオイは少女ながらも何とも言えぬ色香を醸し出していた。

完全に尖りきった乳首とクリトリスをミナトとマサノリがさし示したように同時にコリコリ弄ると、ああ、あ……と、可愛らしくも男を興奮させる色艶のある声を漏らす。アソコはヒクヒクといやらしく蠢きながら女蜜をトロリと流しており、紅潮した顔は何かを我慢するように眉間にしわを寄せていた。

シホと同様に彼女の肉体は何も知らなかったのに、段々と快楽を教え込まれていた。

「さて～、メインディッシュは後にして次は背面だ」

身体の正面部分は、100回にも及ぶ繰り返し作業のおかげでローションに含まれていた粘液はすっかりと肌から体内へ染み込み、穴さえ除けばすでに肉体改造は完了していた。

ミナトとマサノリはアオイの身体をひっくり返して彼女の顔を横に向けた。そして汗のせいで背中に張り付いている長髪を横に避け、今度は身体の背面にローションをかけていった。

「……ん……う……う……、ふ……ん……は……ふ……」

背面は一度もローションを塗られていない。ゆえに特に感度も上がっていないので、最初の数回塗っていくうちに、アオイは落ち着きを取り戻し、顔の紅潮も戻っていった。

マサノリは腰から肩までかけて、ぐっぐっと強くマッサージするようにローションを塗っていく。騎士になるための訓練は少女の身体であってもコリを残しているため、それをほぐす目的があった。もちろんそれは親切心からではなく、肉体をリラックスさせ、より快楽に肉体を没頭させるためだった。次に首回り。強く優しく強弱をつけながら、ローションを塗り、まだ塗っていない腕の裏も忘れない。

ミナトは、ふくらはぎから踵まで一気にローションを塗っていく。それが終われば、次は太もも。よく引き締まった、若さゆえの瑞々しさをもった太ももだった。これからさらに成長すれば、無意識にでも男を誘惑する太ももになるだろうと予想できた。丹寧に丹寧に、こねるようにローションを塗りにくっていく、最後に尻へとミナトは手をかけた。まだまだ膨らみは物足り

ないが、鍛えているおかげで張りはしっかりとあり、ぎゅむっと驚掴みにする指がわずかに沈み込むが、いい弾力が指を押し返してくる。ミナトはぎゅむぎゅむとその弾力を楽しみながらも、しっかりとローションをしみ込ませるために手際よく、若尻を揉みしだく。そして片手で左右に分かれる尻丸肉の一方をグイッとずらし、キュッとすぼまった菊門をあらわにする。指にたっぷりローションをつけ、円を描くように穴をなぞったり、指でカリカリ搔いたり、塗り忘れがないように皺一つ一つに丁寧に塗っていく。

「は……あ……ん……、ん……ふ……く……う……、くあ……ああ……」

正面と同じように裏面も、何度も何度も同様の動作を繰り返して肉体にローションをしみ込ませていく。

顔は再び紅潮を始め、テカテカ光る背中や尻、太ももが蠱惑的に映える。

五指を爪立てて、背中と尻に触れるか触れないかの距離感で優しく円を描くようになぞったりすると、ゾクゾクとした快感がアオイの肉体に走り、ピクピクと指や足が反応する。

そうしてローション塗りが終わったところには、アオイの肉体の体表はすべて感度が上がり切っていた。

「さて、次だ。これからが面白くなるんだから」

2人は再び、アオイの肉体をひっくり返した。

ミナトがアオイの脚をわずかに広げると、発情し完全に開いた肉華は準備万端とばかりにトロトロと蜜を流している。

ミナトとマサノリはテーブルから別の瓶を開けた。中身をクリームであり、2人はそれを指に掬った。そしてミナトは指をゆっくりと緩んだアオイのマンコへ突っ込み、マサノリはアオイの顎をつかんで、半開きの口の中へ指を突っ込んだ。

「あひゅ……は……ひゅ、ん……、か……は……あ……ひ……」

ミナトは指をゆっくりと奥へ入れていく。異物を入れられたマンコは防御反応でギュッと強く閉じられたが、お構いなくミナトは指を奥へと入れていく。すると、すぐにコツンと壁に当たった。それは興奮して降りてきた子宮口であり、もう少し成長していればミナトの指も届かなかっただろう。ふにぶにとした子宮口はまだまだその口を閉じているようだが、トントンとクリームをついた指先で子宮口にクリームをつける。そしてミナトはゆっくりと指を戻し、再びクリームを掬って、ナカへと入れた。

マサノリは舌を、指で擦りつけるようになぞる。何かを食べる際でもわずかに快感を感じ、興奮時であれば肉棒を舐めるだけで快感を得るように、舌にクリームを何度も擦り付けていた。

「あ……んふえ……ふは……は……、んひゅ……か、ひゅ……」

指なぞ入れられたことなく、また快感を得たことのないアオイのナカは、繰り返させるクリームの塗布に一肌と違って直接体内への塗布は吸収率も高く一感度を素早く上げていく。異物を入れられギュッと閉じていた膣は快感を感じ始め、本能がもっと快感を得るために膣をギュッギュッと脈動させ始めた。

口の中へと突っ込まれて最初は舌が指を押しつけようとしていたが、感じ始めた快感によって、逆に指に舌が絡み付きにくく。クリームを掬うために指が口から抜かれると、舌が指を探すように口内を彷徨っていた。唾液に溶けたクリームの成分が、唾液とともに喉から胃へと流れていき、口が、喉が性器と同様の感度まで引き上がっていく。

「お、ここかあ、Gスポット。おっ、ここの反応もいいね」

ミナトは指の抜き差しを繰り返しながらも、グググッと肉壁を押し込み、アオイのナカの弱い所を探っていた。ものの数回で的確にアオイの弱点を発見したミナトは次の段階とばかりに、Gスポットと弱いところを責め始めた。

「あっ、あっ……ああっ、ん……ふ……ひっ、ふっ……」

そしてマサノリはアオイの顔を横に向け、彼女の薄い唇に自らの唇を重ね、口内を舌で蹂躪し始める。

「はひゅっ……んふえ……、んう、ふっ、んううっ、ふっふっ……、んう……ああ……は……ああ……」

ミナトの指はグイグイとGスポットや弱いところを刺激し、その度に絞り出されるかのように愛液が膣壁から分泌されていく。指をしっかりと啜えていても指が動く度にわずかに空いた隙間が

らトトロと際限なく愛液は漏れ、足がガクッガクッと微動する。

マサノリの舌が口の中へと侵入すると、待ち望んでいたかのようにアオイの舌が絡み付く。しかしそれは所詮、知識のない少女の本能が繰り出すもので見戯に等しい。マサノリは絡みを解き、アオイの舌に自分の舌を絡み付かせ、彼女の舌を激しく責める。

「は……んうっ、ふっ、く……はぁ……あぁあ……ひゅっ、んぢゆる……んふえ……」

2人は20分ほど行為を続けた。下半身はジुकジुकとした快感が溜まり、快樂の風船は大きく膨らんでいた。口内にはもはや気持ちよくなる場所はなく、喉までもクリームを吸収し、イラマチオでも苦しさの中に快感を覚えてしまうほどになっていた。

「さてと……、そろそろイかせちゃおうかな。脚も広げているし、身体は素直だなあ」

「そうか。なら俺は乳首イキも教えてやろう」

ローション塗りからすでに1時間半が経過していた。そろそろ本格的に始める時間が来たのだ。入念な手入れにより、アオイの肉体の発情は止まらず、その身は快樂の虜へと墮ちようとしていた。

アソコを弄られ始めてから、アオイの脚は少しずつ動いており、いつの間にかがに股に開かれている。それはアオイの淫乱な本能がそうさせたのであって、ミナトは何もしていない。

改めて、ミナトは1本の指ではなく、中指と薬指の2本をアオイの発情マンコへ入れ、マサノリは完全に勃起した両乳首を強弱と緩急をつけてクニクニと、指でつまんで何度も転がす。

「あはあっ……♥♥ああっ……あっ、あっ……♥んっ……あっあっあっ……♥♥」

アオイは初めて大きく啼いた。無意識であっても極上の快樂が脳を刺激し、彼女に声を出させたのだ。